

【一】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えははいねいに書くこと。

- ① この薬はすべての病気に^キく。
- ② 大国にジュウゾクすることをこぼむ。
- ③ 年功ジョレツの仕組みは考え直すべきだ。
- ④ 日本文化のゲンセンをたどる旅。
- ⑤ 広く世界に門戸を開く。

(1)

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

巨大な大木となる「木」と道ばたの雑草のような小さな「草」では、進化の過程では、どちらがより進化をした形だろうか。幹を作り、枝葉を茂^{しげ}らせる木の方が、より複雑な構造に進化をしているように思うかも知れないが、じつはより進化をしているのは草の方である。

コケのような小さな植物からシダ植物が進化したとき、頑強な茎と仮道管^{かどうかん}という通水組織を利用して、巨大な木を作り上げた。その後、シダ植物、裸子植物、被子植物の進化を通して、植物はすべて巨木の森を作っていたのである。

A、木¹から草が^{注1}進化をした。
草が誕生したのは、白亜紀の終わりがごろであると言われている。

恐竜映画などを見ると、巨大な植物たちが森を作っている。その時代の植物は、とにかくでかかった。恐竜が繁栄した時代は、気温も高く、光合成に必要な二酸化炭素濃度も高かった。そのため、植物も成長が旺盛^{おうせい}で、巨大化することができたのである。

そして、その大きな木の上の葉を食べるために、恐竜たちもまた巨大化していった。すると、植物も恐竜に食べられないように、さらに巨大化する。そして、恐竜は巨大化した植物を食べるために、巨大化し、さらには首まで長くしていった。こうして植物と恐竜とが競い合^あって、巨大化を進めていったのである。

ところが、白亜紀の終わりがごろ、それまで地球上に一つしかなかった大陸は、マントル対流^{注2}によって分裂し、移動を始めた。そして、分裂した大陸どうしが衝突すると、ぶつかった歪^{ゆが}みが盛り上がり、山脈を作る。すると山脈にぶつかった風は雲となり、雨を降らせる。こうして地殻変動が起きることによって、気候も変動し、不安定になっていったのである。

山に降った雨は、川となり、やがて下流で三角州を築いていく。草が誕生したのは、まさにこの三角州であったと考えられている。

三角州の環境は不安定である。いつ大雨が降り、洪水が起きるかかわからない。そんな環境ではゆっくりと大木になっている余

(2)

裕がない。

そこで、短い期間に成長して花を咲かせ、種子を残して世代更新する「草」が発達していったのである。その後、目まぐるしく変化する環境に対応して、草は、爆発的な進化を遂げた。陸上の哺乳類が、再び海に戻ってクジラになったように、環境に適応して、草から再び木に戻ったものもある。昆虫の少ない環境では、虫媒花から再び、風が花粉を運ぶ風媒花に進化したものもある。こうして、地球上のあちこちで、多様な植物が進化を遂げていったのである。

こうして、植物は、木から草へと進化していった。

しかし、考えてみると不思議である。

木になる木本性の植物は、何十年も何百年も生きることができる。なかには屋久島の縄文杉のように、樹齡が何千年にも及ぶようなものさえある。一方、草本性の植物の寿命は一年以内か、長くてもせいぜい数年である。

2 その気になれば、数千年も生きることのできる植物が、わざわざ進化を遂げて、寿命が短くなっているのである。

すべての生物は死にたくないと思ってる。少しでも長生きしたいと思ってる。千年、生きられるのであれば、千年、死なずにいたいと思うことだろう。それなのに、どうして植物は、進化の結果、短い命を選択したのだろうか。

長い距離のマラソンレースを走り抜くことは大変である。さらに障害物レースだったとしたら、どうだろう。四二・一九五キロ先のゴールにたどり着くことは、簡単ではない。

しかし、それが一〇〇メートルだったら、どうだろう。全力で走り抜くことができる。もし、多少の障害が待ち構えていたとしても、全力で障害を乗り越えられるはずだ。テレビ番組の企画で、マラソン選手と一〇〇メートルずつバトンリレーをする小学生の対決が行われるが、マラソン選手も、全力疾走する小学生のバトンリレーにはかなわない。

植物も同じである。千年の寿命を生き抜くことは難しい。途中で障害があれば、枯れてしまうかもしれない。これに対して、一年の寿命を生き抜く方が、天命を全うできる可能性が高いだろう。

B、植物は寿命を短くし、一〇〇メートルを走り切つてバトンを渡すように、次々に世代を更新していく方を選んだのである。特に、植物は世代を経ることで変化したり、進化を進

めたりすることができる。そのため、世代を進めることで、変化する環境や時代の移り変わりに対応することも可能になるのである。

仏教では「老いること」や「死ぬこと」は苦であるとされている。

すべての生き物が「死にたくない」と思っている。それでも、すべての生き物は、老いさらばえて、最後には必ず死を迎える。それは生きとし生けるものの逆らえない宿命である。

しかし、である。すべての生き物は死ぬことなど望んでいないはずなのに、「老いて死ぬ」という行為自体が、生物が進化の過程で自ら創り出したものである。

私たちは自動車や電化製品が古くなるように、歳を取れば、体中の器官が古くなってガタが来るのは当たり前だと思っている。ただし、考えてみれば、私たちの体の細胞は常に更新されて新しくなっている。肌も古い細胞は垢となって、常に新しい細胞が生まれている。たとえ、百歳の身体であっても、私たちの体は日々生まれ変わり、赤ちゃんと変わらない肌をしていても何らおかしくないのである。しかし、私たちの体はいつまでも赤ちゃんのような肌ではいられない。私たちは確実に老いていく。それは、私たちの体が、自ら老いていくようにプログラムされているからである。私たちの体の細胞には、自ら死ぬためのプログラムが組み込まれている。体の細胞数を一定に保つために、一定の細胞分裂を行うと死滅するようになっていのである。このような細胞死はアポトーシス（プログラムされた死）と呼ばれている。

3 「死」は地球上に生まれた生命が創り出した発明品である。

細菌やアメーバのような原始的な原核生物は、細胞分裂をして増殖していく。細胞分裂をして増えても、元の細胞と同じ細胞が増えるだけである。原核生物はこれを無限に繰り返していく。細胞分裂を繰り返したからと言って、年老いて細胞が疲弊していくことはない。そして、細胞は増えても死滅をするわけではないから、原核生物は永遠に死ぬことはないと言えるかも知れない。すべての生物が死ななければならないわけではないのだ。

C、同じ単細胞生物でもゾウリムシのような真核生物は違う。ゾウリムシは分裂回数が有限である。そして、七〇〇回

ほど分裂をすると、寿命が尽きたように死んでしまうのである。ただし、死ぬまでに他のゾウリムシと接合をして、遺伝子を交換すると、新たなゾウリムシとなつて生まれ変わる。すると分裂回数はリセットされて、再び七〇〇回の分裂ができるようになるのである。こうして生まれ変わったゾウリムシは、元のゾウリムシと違う個体だから、これは次の世代を作って、自分は死んでしまったと見ることができる。こうして、真核生物は「死」と「再生」という仕組みを創り出したのである。

「形あるものはいつかは滅ぶ」と言われるように、この世に永遠であり続けることのできるものはない。何千年も生き続けられば、その間にさまざまな故障もあることだろう。そこで生命は永遠であり続けるために、自らを壊し、新しく作り直すことを考えた。つまり、生命は一定期間で死に、その代わりに新しい生命を宿すのである。

D、時代の変化に合わせて、自らを変えていく必要がある。進化を考えれば、元の個体を増殖し続けるよりも、古い個体を壊して、新しい個体を作った方がいい。

そこで、生命は死と再生を繰り返す、世代を進めることで命をリレーしていく仕組みを創り出した。そして、変化し続けることによって、永遠であるとしたのである。

生命は死ぬことによって、永遠であり続ける。そして、生物は限られた命を全うするために、全力で生き抜くのである。

命の輝きを保つために、生命は限りある命に価値を見出したのである。

(稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか 弱くて強い植物のはなし』)

※問題作成の都合上、文章中の小見出し等を省略したり、書体を変更したりしたところがあります。

注1 白亜紀……約一億四五〇〇万年前から六六〇〇万年前までの期間。

注2 マントル対流……地球の地殻と核との間にある中間層の中での、きわめてゆるやかな対流。

注3 屋久島の縄文杉……屋久島に自生する最大級の屋久杉に付けられた名称。

注4 老いさらばえて……歳をとりみすばらしくなつて。

注5 原核生物……明確な輪郭りんかくを持った核が見られない細胞からなる生物。

注6 真核生物……身体を構成する細胞の中に核を有する生物。

問一

A ☐ D ☐ にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

なお、同じ記号を繰り返し用いてはいけません。

ア しかし イ つまり ウ また エ そして オ たとえば カ だから

問二

線1「木から草が進化をした」とありますが、その理由を説明した次の文の空らんX(三字)・Y(十八字)にあてはまる言葉を問題文中から抜き出して答えなさい。

環境が X(三字) になり、 Y(十八字) から。

問三

線2「その気になれば短くなっているのである」とありますが、これはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 環境の変化が激しい場合、寿命が長いほど生きている間に大きな危険にさらされる可能性が高くなってしまいが、寿命が短ければ、その植物は天命を全うしやすくなり、障害にぶつかることがなくなるから。

イ 寿命が短いと、それだけ天命を全うできる可能性が増し、次々と世代交代をすることで、時代ごとの環境に合わせ変化していくことが可能となり、次の世代へとより確実に命をつないでいけるから。

ウ 様々な障害を植物が乗り越えていくには、一生の間に次の世代を多く生み出していかなくてはならないが、寿命が短いと、それだけ子孫を残す機会が少なくなり、絶滅してしまう可能性が高まるから。

エ 台風や火山の噴火等の突発的な障害に対しては、寿命が短い植物の方が強い傾向があり、寿命が長い植物はそうした障害に遭遇するとその場で死んでしまい、結局次の世代を残すことができず絶滅してしまうから。

(7)

問四

線3「死」は地球上に発明品である」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生物が必ず死ぬのは、蓄積された疲労によつて弱った個体を減らし、強い生命力を持った個体を多く残していくための仕掛けだということ。

イ 生物が必ず死ぬのは、いくら進化を繰り返しても解消することができなかった、地球上で生きとし生けるものに与えられた運命だということ。

ウ 生物が必ず迎える死は、優れた種が劣った種を絶滅させていくために、進化の中で生物が自らあみだした革新的な仕組みであるということ。

エ 生物が必ず迎える死は、世代を超えて一層長く命をつないでいくために、進化の過程で生物が身につけた画期的な仕組みであるということ。

(8)

問五

線4「命の輝きを」のである」とありますが、これはどういうことですか。問題文全体をふまえ、五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問六 次のア～エを読み、問題文の内容と一致する場合は○、一致しない場合は×をそれぞれ解答らんに記しなさい。なお、すべて○、または、すべて×で解答した場合、採点の対象になりません。

ア 恐竜が繁栄した時代に木が巨大化していったのは、環境が適していたことに加え、恐竜に食べられないようにするためである。

イ 植物や動物は、より優れたものに進化をした後、環境の変化によって再び元の劣った形へと退化することもある。

ウ 人間の身体を形づくる細胞は絶えず更新されているため、歳をとっても身体が老化していくことはない。

エ ゾウリムシは自らの複製を作る回数に限界があるので、他の個体と遺伝子を交換し、自分とは違った個体となる。

問七 問題文の論の進め方を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 木から草が進化した経緯について順を追って説明していき、その過程について筆者の意見を述べた後、それとは逆の内容として、生命にとって死がどのようなものであるかという話題へと展開している。

イ 木から草が進化したという事例から、植物にとって寿命が短くなることによって得られる利点について示し、それを受けて内容をより一般化し、生命における死の存在理由という話題へと展開している。

ウ 木から草が進化したという具体例から植物一般についての説明へ移り、一〇〇メートル走の比喻などを用いながら植物の寿命の変化について述べ、それをまとめる形で死に関する話題へと展開している。

エ 木から草が進化したという結論をまず述べ、そこに至るまでの自然環境の変化について順を追って説明した後、その補助的な説明として、そもそも生命における死とは何かという話題へと展開している。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「うわ、弟の方がいる」

そんな声が飛んできて振り返ると、あいつがいた。

「珍しい、っていうか、初めてだよな。弟の方が来るのって」

井坂都。恐らく、兄をこの調理実習室に引き込んだ人。スクールバッグを右肩にかけて、大腿で春馬に近寄ってくる。衣替えを終えたので、女子の制服はジャンパースカートと白いブラウスになっている。ブラウスを腕まくりし、スカートのポケットに両手をつっ込んだ彼女は、訝しげに春馬を見る。

最近兄に弁当を持たせられるから見かけなくなっただけで、購買に行く途中に通る中庭で弁当を食べているところを何度か見たことがある。兄と二人で歩いているところも、放課後に一緒に出かけて、スーパーの袋を提げて戻ってくるのも。

「兄貴なら、今日は二者面談だよ」

ふっと笑ったと思ったら、そう言って調理実習室に入っていってしまった。閉まりかけた戸に手をかけ、都を引き留める。

振り返った都は、まるで春馬がそうするのをわかっていたかのような顔をしていた。

「腹、減ってる？」

答えは返さず、口元をへの字に曲げた。

「私は腹減った。今日は弁当がちょっと少なかったんだ」

こちらの返事など知ったことかという様子で、都は調理器具を準備し始める。割烹着を着て、髪を一つに結び、手を洗う。そして、食材でばんばんになった冷蔵庫から野菜を運んできて、どんどん刻み始めた。大根、人参、ゴボウ、玉ねぎ。軽快かつ均一な音でどんどん切っていく。

こっちは聞きたいことが、言いたいことがたくさんあるのに。仕方なく隣のテーブルに腰掛けてそれを眺めていると、冷蔵庫

から取り出してきた豚肉のパックを投げて寄こした。

「暇なら手伝え、弟」

「はあ？ なんて」

「先輩には敬語使え」

「なんでですか」

「私に用があつて来たんだろ？ それくらい付き合ってくれよ」

ほら、兄貴の割烹着使え、と今度は白い割烹着を投げてきた。広げてみると、胸から腹にかけて、醤油やだし汁の染みが点々とあつた。一ヶ所だけ、血液らしき赤黒い染みまである。

「それ、初めて包丁でざっくりやつちまったときの跡な。悲鳴上げてたよ」

そういえば五月頃、親指にでかい絆創膏を巻いていたことがあつた。理由は頑なに教えてくれなかったけれど、やはりこでやったのか。

「それを着たら手を洗つて。その豚肉を食べやすいサイズに切る」

動き出さない春馬に、さらに付け足す。

「手伝ってくれたら、あんたが知りたいことも教えてやるから」

この女は嫌いだ。あんたが何を知らなくて、何を¹知りたくてやきもきしているかも、私は知っています。それを隠すことなく、こちらに主張してくる。

「……俺、料理なんてやったことないですから」

丈の足りない割烹着に袖を通して、吐き捨てた。

(中略)

「あんた、やつぱり兄貴とそっくりなのな」

切り終えた豚バラ肉を前にほっと一息ついていると、向かい側から突然そう言われた。

「でも、やつぱり弟の方がガキっぽい顔だな」

そんな余計なことを言う。

「ああ、そうですか」

まな板ごと豚バラ肉を差し出すと、その不均等なサイズとお世辞にも綺麗とは言えない切り口に、案の定「あーあー」という笑い半分、溜め息半分の反応をされる。

「あと、兄貴の方が、多少器用。ドングリの背比べだけど」

「双子じゃないですから、当然でしょ」

「でも、足は弟の方が断然速いんだろ？」

水道の蛇口を捻ろうとした手が止まった。脂まみれの手を、一刻も早く洗いたかったのに。

「去年の秋の段階なら、俺の方がちよつとタイムが速かったですけど。故障しなければ兄貴は、きっと今頃は俺よりずっと速くなつてましたよ」

故障さえしなければ、今頃はインターハイ北関東予選へ向けて練習していたはずだ。

「大学だつて、きっとスポーツ推薦で陸上の強いところに行ったはずなのに」

「それが故障したばかりに、一般入試で日農大か」

夏休みに死ぬ気で勉強しないと、やばそうだけどな。そう言いながら都は、炒めた野菜と豚肉の入った鍋の水にだし汁を加え、蓋をする。やはり、彼女は早馬の希望する進路を知っていた。恐らく、自分よりずっと詳しく。

「そりやそうですよ。勉強なんて、今までもろくにしてなかったんだから。いっそ、落ちちまった方がいいんじゃないかな」

だし汁を入れてから煮立つまで自分達の出番はないようだ。静かになった調理実習室で、自分の言葉が、自分で思っていたよりずっと冷たかったことに春馬は驚いていた。長く冷たい針になって、体の節々に刺さるようだった。

2 都は怒るんじゃないかと思った。早馬を管理栄養士の道に差し向けたのは、彼女に思えたから。
「そうかもな」

意外な返答に、春馬は思わず都を横目で凝視した。椅子に座ってコンロにかかった鍋を眺める彼女が、一体どんな意図があつてそう言ったのか、見当もつかなかった。

同時に、腹の底が鍋の中のだし汁と同じように煮立っていく気がした。

「応援してるんじゃないんですか？」

自分だって、兄が大学に不合格になればいいとたった今、言つたくせに。

「頑張つてほしいわけでもないし、応援してないわけでもない」

「どうしてですか」

「あいつが管理栄養士目指してるのは知ってるだろ？」

「給食室のお兄さんにでもなるつもりなんすかね」

「あんた、管理栄養士がどういうことするかちゃんと調べてないだろ」

そういう問題じゃない。

「兄貴が陸上やめるなんて」

有り得ない？ 間違つてる？ おかしい？

酷い？

「……なんだか、ちょっと違う気がする」

「やめたかったんじゃないかな。」 X

「なんでそんなことわかるんですか」

大体あなたはその頃、兄と知り合つてさえないじゃないか。

「だって、どうしても続けたいなら死に物狂いでリハビリするなり、なんだって手段はあるだろ？ それを理解した上で、あなたの兄貴は走ることから離れようとしてるんだよ」

わかつてる。春馬自身も、早馬自身も、そして父や顧問やコーチやチームメイトも。程度に違いはあれど、みんなうつすらと感じている。

理解しないように必死になっているのは、もしかしたら春馬だけなのかもしれない。

「滑稽だよ、あんたの兄貴」

可哀想でも哀れでもない。滑稽。その表現に、春馬は自分の中で怒りの感情が湧き起こるのに気づいた。

「なんだよ、それ」

「陸上がなくなつちまつた場所に、必死に違うものを詰め込んでる」

「わかてるのに、どうして止めてくれないんですか」

「やめる決断をしたのは私じゃない。あいつが自分で気づくまで、気が済むまでやるしかないんだよ」
「そんなことしてるうちに、あつという間に大学生になっちゃう」

悩みたいなら半年でも一年でも悩めばいい。でも、人の体は変わらないまま待つてはくれない。周りの人間だって待つてはくれない。悩み抜いた末に兄が陸上へ戻つてきても、そこに彼の居場所がある保証はない。ない可能性の方がずっと高い。一年以上のブランクを抱えた早馬の体が、どれくらい走れるのかも、わからない。

「あんたは、兄貴に走つていてほしいんだね」

「そうですよ」

悪いか。

純粹な「仲間」という存在だつていいし、タイムや順位を争う相手だつていい。長距離を走る人間にとって、隣を、前を、後ろを、走っている人間がどれだけ大切か、恐らく人にはわからない。

「俺は兄貴に、走っていてほしいんだ。あんたに理解してもらおうとは思わないけど」

「ふて腐れるなよ。兄弟仲がいいのは悪いことじゃない。兄貴をライバル視するのも、弟の性だよ」

鍋から、徐々にことごと煮立つ音がし始めた。それに気づいた都は灰汁を取り、お玉に味噌を取って菜箸でかき混ぜながら鍋の中へ溶かしていく。

「いつも、兄貴が前を走ってたんですよ」

鍋から昇る湯気を見つめ、春馬は言った。その向こうに、蟹気楼のように昔のことが思い浮かんだ。

「うちの家族ってどうしてか俺にばかり過保護なんですよ。反対に兄貴はしっかりしてる、なんて言われて」

「わかるわかる。その通り」

大袈裟に頷いてみせる都を無視して、続ける。

「小学校のとき、全校生徒参加のマラソン大会があつて。学年ごちゃ混ぜで、全員で一斉スタートするんです。上級生を追い抜けるのが楽しくて、俺も兄貴も毎年張り切つて練習してたんです」

「あ、その話、兄貴の方からも聞いたことある」

「日曜の夕方とかに、家の周りの堤防とかを家族で走るんです。兄貴の方が速いから、どんどん差が開いていく。するとうちの親父は『頑張れ、頑張れ』って俺と並走するんです。あの頃は祖母ちゃんも元気だったから、自転車に乗って俺の後ろをくっついてきてた」

そうだ。でも二人は、早馬には決して並走しないのだ。春馬の隣から「お兄ちゃんも頑張れー」と声をかけはしても、並走まではしない。自分の方が一歳小さいのだから、仕方がなかったのかもしれない。でも正直、ちょっと鬱陶しかった。

「すぐ隣を親父や祖母ちゃんが走つてるとペースも乱れるし、なんだか恥ずかしくて、振り切つて兄貴に追いつこうとするんですよ。すると兄貴の奴、ちらつと振り返つて笑うんです。で、スピード上げやがるんですよ。もう、こっちはついていけない」

本番だつて毎年そうだった。上級生をどんどん追い抜きながら、兄の背中を集団の中で探すのだ。追いかけるのだ。でも、ど

うしても追いつけない。追いついたと思つたら振り切られる。結局兄が卒業するまで、一度も抜くことはできなかった。もちろん、春馬がマラソン大会で総合優勝することもなかった。

「悔しくて泣いたこともあったなあ、そういえば」

中学で陸上を始めたのは、陸上部に入った兄を追つたからだ。

「やっと追いついたと思つたのに、故障しやがつた」

高校に入ってから自分の走りが強くなっていくのを実感していた。早馬と同じ大会に出て、早馬よりいいタイムで、いい順位で競技を終えることも増えた。

きつと、兄は笑いながらまたペースを上げるのだと思つていた。

Y

無意識に俯いていた春馬の前に、都が歩み寄る。そして突然、春馬の肩を掴んで「こっち来て」と黒板の前へ引つ張つていき、教卓を指さした。

「いきなりなんですか」

「ここに隠れてて」

教卓の下には、人一人ほどが入れそうなスペースがあつた。そこに入っている、ということだ。

「あと、それ脱いで、割烹着」

問答無用で割烹着を脱がされる。はあ？ 意味わかんねえ。そう言おうとした春馬を制するようにして、都が自身の唇の前に人差し指を立てた。押し黙ると、調理実習室の外、廊下から、微かに人の足音がする。

「あんたの兄貴が来た」

とん、とん、とん。少し重い足取り。これが早馬だとすぐにわかるくらい、都は長く早馬とこの場所で過ごしていたのか。たったの二、三ヶ月じゃないか。

それだけのスピードで、兄は陸上からも自分からも離れていったのだろうか。

「あんたの兄貴、今日も稔^{みのる}の畑でこき使われてる。取れたてのカブを、ここに持ってきてくれることになってね」再びぐっと肩を押され、教卓の下に押し込まれた。このまま調理実習室を出たら確実に鉢^{はち}合わせる。それは嫌だ。

俺は、お前のためなんかに走ってない。

夏が終わったなら、陸上部は引退する。もう、走らない。

早馬の言葉が次々と思ひ出される。早馬とはあれ以降、あまり会話をしていない。口を利かないとか、顔を合わせても無視するとか、そういうふうにはならない。でも、早馬の顔を見るたびに、自分の中の何か^{なにか}が軋^{きし}んだ音を立てる。

教卓の下で両膝^{ひざ}を抱えると、同時に調理実習室のドアが開く音がした。

「遅かったじゃん」

都の声。

「手伝いに来てくれればよかったのに」

早馬の、声。本当に、早馬だった。楽しそうに話しながら、早馬が手を洗う音がする。

早馬が持ってきたカブと手羽元を使って、本当に煮物を作るつもりのようなうだ。おいおい、一体どれくらいここにいればいいんだ。嫌な予感に溜^ため息を必死に堪^こえていた頃、その話は始まった。

「進路のこととか、稔^{みのる}になんて言ったんだよ。まあ、面談のあとに稔^{みのる}の畑でこき使われてたあたり、答えはなんとなく予想つくんだけどさ」

二者面談の話。進路の話。

眞家^{まいえ}早馬の、これからの話。

早馬は、小学校の頃の話をした。先程春馬が都に聞かせた、マラソン大会のこと。

兄はしょっちゅうトップを走っていた。マラソン大会の前は家の近くの堤防を周回する特訓に、楽しそうに取り組んでいた。

ああ、きっと先頭を走っているのは、気持ちがいいんだ。誰も自分の前を走っていない。目の前の景色は、全部自分のもの。

兄が卒業したあとのマラソン大会で、春馬は早馬と同じ光景を見た。誰も前を走らない光景を。ゴールの瞬間に聞こえる歓声を。そうか、これがあるから、早馬はどんなに長い距離でも、肺や心臓が壊れそうな苦しさの中でも、楽しそうに腕を前後に振って走ることができるのだ。

自分もこの気持ちのいい場所にいたいと思うことは、そんなに悪いことだったのか。

兄を追い抜くために練習して、同じように陸上部に入って。

それは、悪いことだったのか。

「学年が上がったり、中学から高校に上がったり、そうやって段階を踏みながら、力のない奴や向いてない奴はふるい落とされていくんだよ。みんな、走らなくなっていくんだ」

やめろやめろ。そんな話をしないでくれ。

都が再び鍋をコンロにかけたのか、コンロのつまみを捻^{ひね}り、火を点ける音がした。

「自分もそうだって言いたいのかい」

やめろ馬鹿。

そんなこと兄貴に聞くじゃねえ。

「そうだな。そう思う」

何、あっさり答えてるんだよ。

膝を抱えていた両手を、春馬は握り込んでいた。制服のスラックスに深い皺^{しわ}ができる。

そのあとの二人のやりとりも、ちゃんと聞こえていた。弟に負ける兄の、愛憎^{あいそう}が入り交じったどうしようもできない感情を。あんた、それでいいんだ。

じゃなきゃ、もっと真面目にリハビリしてるだろ。

8 そんな残酷な会話を、喉に必死に力を込めながら、聞いていた。

「勝手にやめた兄貴に『お前のために』って面で飯の世話されてる弟が、可哀想だな」

「そうかもしれないけど、どんな世界だって、上に行く奴っていうのはそういうものを無理矢理背負わされるんじゃないかな」
やめてくれよ。そんなの俺は求めてない。背負いたいわけでもないし、誰かの理想を預けてほしいわけでもない。早馬に勝ちたいと思う。でも、蹴落として、踏み潰してまで行きたい場所は、自分にはない。

ただただ、彼と同じ場所を走っていたただけだ。

「怪我をしたとき、悲しかった。悔しかった。でも、安心もしたんだ」

「やめる口実ができたから？」

都の声は、笑えるくらい、普通だった。優しく、母性たつぷりに聞いてやる気はないみたいだ。

「もう、俺は弟に負けないで済むんだ」

彼女の問いに頷く早馬の声は、顔を見ることのできない春馬からでもしつかりわかるくらい、潤んで震えていた。そんな早馬に、都が近づいていくのがわかった。なんの会話もなかった。音もしなかった。ただ、コンロの上で鍋が煮立つ音だけが聞こえた。

けれど、どうしてだろう。あの乱暴な口調の井坂都が、がさつで無遠慮で一ミリとて優しさとか心配りを見せない都が、兄の傷口をそつと撫でてやる姿が目につかんだ。春馬も助川も、父も顧問もコーチも真木先生も癒やしてやれなかった傷を、静かに、静かに。

(額賀 澪『タスキメシ』)

※問題作成の都合上、文章を一部省略しています。

問一 ―線1―「何を知りたくてやきもきしているか」とありますが、春馬は何を知りたがっていますか。その説明として最も

も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 放課後に調理実習室で二人きりで過ごす兄と都の関係。

イ 陸上をやめてしまった兄と陸上を続ける自分との行く末。

ウ 担任の先生と兄との二者面談の内容や畑仕事を手伝う理由。

エ 陸上を離れ、管理栄養士を目指す兄の今の気持ち。

問二 ―線2―「都は怒るんじゃないかと思った」とありますが、この時春馬はなぜそう思ったのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 兄を陸上の世界から遠ざけた都を、遠回しに責め立てようと思って言った言葉があまりに厳しいものになったから。

イ 兄が陸上から遠ざかった本当の理由も聞き入れない態度のまま、兄と都を責め立てるようなことを言ったから。

ウ 都にとって誰よりも大切な兄のことを責め立てる言葉が、都のことも責め立てる内容ととられそうだったから。

エ 都を責め立てる気持ちはなかったが、軽はずみな発言が都に対するあてつけになるような気がしたから。

問三 X・Y にあてはまる最も適当なことを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|---|------------|
| X | | Y | |
| ア | 怪我をする前から | ア | ペースを下げやがった |
| イ | 高校に入る前から | イ | 勝ち逃げしやがった |
| ウ | 三年生になる前から | ウ | やめやがった |
| エ | メンバーを外される前から | エ | 順位を上げやがった |

問四 — 線3「春馬は自分の中で気づいた」とありますが、「怒りの感情が湧き起こ」ったのはなぜですか。その理由を四十字以内で答えなさい。

問五 — 線4「自分でやるしかないんだよ」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 怪我が完治するまでに時間はかかるが必ず治ることに気づくまで都と一緒にいるということ。
- イ 自分にとって本当にやりたいことは料理ではないと気づくまで料理に打ち込むということ。
- ウ 怪我は完治していて走ることもできることに気づくまで弟のサポートをするということ。
- エ 自分が本当にやりたいことに気づくまで陸上部のマネージャーとして働くということ。

問六 — 線5「ちょっと鬱陶しかった」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 春馬はいくら兄よりも下の学年であったとしても、いつまでたっても子ども扱いをされていたこと。
- イ 春馬は本当は努力している姿を見られたくないのに、その姿を父や祖母に間近で見られてしまったこと。
- ウ 春馬はどうやっても、どれだけ練習したとしても、兄には決して追いつけないということを思い知らされたこと。
- エ 春馬は体力的にも体格的にもそれほど差があるわけではないのに、末っ子なのだとすることを認識させられたこと。

問七 — 線6「兄はくだらうか」とありますが、この時の春馬の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえ陸上の世界に戻れたとしても昔のように速くは走れないだろうが、必ずまた自分と一緒に競い合えるはずだ、という期待を込めた思い。
- イ 兄は本当にこのまま走ることをやめてしまい、長い間一緒に走ってきた俺のことも見捨てるつもりなんだろうか、という切ない思い。
- ウ 都と急速に親しくなったのと同じくらいの速さで、長い間自分と続けていた陸上から遠ざかってしまったのか、というやりきれない思い。
- エ 日農大を受験して合格できれば、陸上部に入ることも当然可能であるし、大好きな陸上は続けられるはずだ、という兄を責める思い。

問八

——線7「弟に負ける兄の『どうしようもできない感情』とありますが、これはどのような感情だと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幼少の頃のイメージをもったまま、弟を愛おしく思う気持ちと、自分に追いつき追い越していく時に感じる憎しみが入り交じった感情。

イ 弟が自分を超えられないでいる時に感じる応援する気持ちと、とうとう超えた時に感じる悔しさが入り交じった深い愛に包まれた感情。

ウ 何も考えずに自分を追ってきた時の愛くるしさと、成長して自分をライバル視するようになった時から感じる憎たらしさが入り交じった感情。

エ 弟が自分を乗り越えていくことに対して、身内を応援する気持ちからくる喜びと、他人に負けた時とは違う悔しさが入り交じった感情。

問九

——線8「そんな残酷な会話」とありますが、どうして「残酷」だと言えるのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人で苦しい思いをして走る陸上よりも、二人で協力して行い、心から楽しいと思える料理の世界にのめり込んでいく兄の信じられないような本音に、失望以外何も感じられなかったから。

イ 兄の心の奥底にひそみ今まで誰にも言えなかった、自分に負けないですむという本音を聞き、深い愛情をもって支えてくれた兄に抱いていた理想像が崩れてしまったから。

ウ 今まで長い間力を注いできた陸上をきっぱりとやめてしまおうという兄の意志が明らかに、兄に陸上選手としての限界を思い知らしてしまったのが結果的に自分であるとわかってしまったから。

エ 他人と競い合うことを二度としないですむという甘えた理由から、陸上の世界に戻らないことを決めた兄のあまりの情けなさに悲しくなり、怒りすら感じたから。

問十 ― 線9「都が、くそつと撫でてやる」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 兄は今まで苦勞を共にしてきた友人やコーチ・監督、さらには家族にすら言えず、自分でもうまく表現できない感情を一人心のうちにしまい込んでいたが、都がその本音を自然な会話から引き出したということ。
- イ 誰にも話せず苦しんでいた兄の胸の奥にしまい込まれた本音を都が聞き出し、弟に負けた時の素直な感情などを兄からうまく引き出してくれた上、弟である自分にその話を赤裸々に聞かせてくれたということ。
- ウ 兄が怪我のために陸上から離れざるを得なくなった時に、都が料理をする楽しさと弟のサポートに必要な栄養管理の基礎知識を教えてくれ、時には優しく時には厳しく励ましながらそばに寄り添ったということ。
- エ 今まで真剣に打ち込んできた陸上をやめなければならなくなった兄の事情を聞き出すことに成功し、弟のために何ができるかを一緒に考え、悩みを聞いてあげた上での確かなアドバイスを投げかけたということ。

問題はこのページで終了です。

8

$\textcircled{2} \times 4$
 ……
 問
 一

A
B
C
D

[illegible][illegible]



⑤×1

問七





②×4

問六

ア
イ
ウ
エ

[illegible]

問九

問七

問十

問六

④ × 6

【一】		10
【二】		45
【三】		45
総点		10

受験番号

[illegible]